

余聞 2 名士や学者、他宗の信仰者だった初代会長

天理教伝道史を調べていると、初代会長（講元）の中に特異な立場や才能を持った人を散見する。大勢の中にはそういった人が当然含まれている。不思議ではないがまた看過できないことでもあろう。土地の名士や資産家、大地主、また学者や他宗教の先達など、一つのことに抜きん出た人は伝道、信仰の上で大きな働きをなしたのではなかろうか。入信時、すでに尊敬を集めていた人が信仰リーダーになるのであるから、最初から好意的に見られていたと考えていい。

初代会長や教会を興した人の中から該当する人を取り上げてみたい。しかし、現在までに設立された約1万7千の教会全てを調査するのは容易ではない。従って私の伝道史調査において気づいたことを紹介するにとどまることを断っておく。

名士、資産家

いわゆる名士と呼ばれた人、それは村長だったり資産家、豪農、大地主などである。この人たちが宗教家として出発する時、周囲にどのような影響を与えたのであろう。とても興味深い。

日本橋大教会初代会長になった中臺勘蔵は日本橋魚河岸の大きな問屋の主人で、多くの使用人を雇い出入りの人も多かった。東大教会を興した上原佐助の話を聞いて入信した中臺は、奉公人や関係ある人々を信仰に導いた。家の二階に神様を祀り修養講座まで行った。入信した人たちは上原や中臺の人柄を信頼して信仰に入ったのであろうが、それ以前に人間的、経済的関係が結ばれており、新しい信仰に入りやすかったかもしれない。

山名大教会の東北伝道が展開される過程で宮城県石巻の道が伸びた。伝道した人は静岡県二俣支教会の平賀治三郎である。石巻で布教するうち土地の名士だった内海五郎兵衛が入信した。内海は、大雨が降ると対岸へ渡ることができない北上川に私財を投じ橋を架け、町の人たちから大変な尊敬をうけていた。この内海が入信したのだから、石巻町の大半が信者になったという。大半とは本当のことだろうか。それだけ内海の信望が篤く入信する人が続出したということであろう。

滋賀県大清水村から栃木県に伸びた道は明治20年代、大変な勢いで栃木県と茨城県に伸展した。この過程で豪農や大地主が入信し、その結果小作や使用人たちが信仰に導かれた。現都賀大教会部内、江川分教会の初代会長になった中山甚平は田地50町歩以上の豪農だった。中山が病を助けられ入信すると中山家出入りの人たちが信仰を始め、中山家応援のもと布教に出たという。また中根大教会初代会長の石塚庭作の本家、栃木分教会（日光部内）の金子氏、茨城県谷浅見分教会（日光部内）の高野氏など、みな豪農や資産家だった。土地の名士が入信した結果、周りの人たちが信仰に導かれた事例である。

東濃大教会初代の勝村伴次郎は幼少から非常な向学心を持ち、小学校教員、村会議員などを務め、30歳にして川辺村長にまでなった。明治26年、勝村の住む村に天理教布教師がやって来た。天理教の悪評を聞いていた勝村は気が進まなかったが、父へのおさづけを受け、「かしもの・かりもの」の話を聞くと興味を持ち、以後毎夜3週間も続けて話を聞き入信に至った。村長である勝村の入信で川辺村一体に信者ができたという。

山名大教会初代会長諸井国三郎は殖産を興そうと養蚕や製

糸、機業など手広く営み、多くの人に仕事の世話をしていた。加えて気質豪快で入信すると家人をはじめ周りの人たちが入信した。人を引きつける力のある人だった。

鹿島大教会の清水小太郎も任侠肌の資産家だった。越乃國の布教師松永鶴吉を援助しながら入信。借金返済を反故にするからと自分が住む村の人たちを入信させた。

この他にも初代の社会的立場が布教に好影響を及ぼした例はあろう。おたすけは誠真実が第一であることは言うまでもないが、名声ある初期信仰指導者が与えた影響もなお考慮に値するものであろう。

学者、他宗の信仰者だった人

明治20年代、撫養の土佐卯之助の伝道により徳島県に天理教が伸びつつあった頃、徳島市で布教する土佐の弟子たちを柏原友吉という真言系行者が妨害した。この話をきいた土佐は柏原に会い、誠真実の教えを説いた。土佐の話に感心した柏原はこの時入信し猛烈な布教を開始した。夜も寝ないでおたすけに回ったが、これは行者として鍛えた精神力の賜だろうか。現名東大教会の創始者である。

大垣大教会初代会長藤江半之丞と六郷分教会（大垣部内）初代会長小西金之助は共に入信前から占いの一つである太占の心得があった。小西は術の上達を願い、大垣の藤江を訪ねた。そこですでに入信していた藤江から太占より優れた信仰があると天理教を教えられた。納得した小西は秋田県六郷町で専心おたすけを開始した。宗教的なものに心を寄せていた人が真実の教えに触れ、伝道、おたすけに目覚めた例である。

麴町、錦江系の初期信仰者には陶宮術（開運修行の一）を行う人が多かった。陶宮術は人間の本心（宮）をよなげる（淘汰する）ことで幸福を得る法だというのが、修行を修めても運命に悩む人があった。この人たちが天理教の教えに触れると、信仰で運命を変えることができると信じるに至った。麴町の久保治三郎、錦江の寺門きみなどである。天理教信仰の優れていることが理解できたのであろう。

秩父大教会初代会長になった新井久之介は子どもの頃から大変な読書家であり、父は御嶽教の神官を務めるほどの人だった。明治22年滋賀県の信者が持ち来た『みかぐらうた』本を読んで、その温かさと偉大さに胸を打たれた。家の信仰的雰囲気と教養の高さが新井を信仰の世界に誘ったのではなかろうか。

他にも教会初代には他宗教の信仰者だった人や、教養人がいる。例えば深川大教会初代の木村八十八は日蓮宗の先達としてならした。沼津大教会初代の大岳久造も御嶽教の行者だった。越乃國大教会2代会長になった高橋直秀は元小濱藩士で奉行を務めていたという。これらの人々は入信時、真実の信仰を見る確かな目が備わっていたと考えることはできないだろうか。身上が助かったと飛びつくのではなく、周りがみんな信仰するからと流行信心するのでもなかった。教えを聞いてその真髓に触れて納得した入信だったのではないか。

教会ができるきっかけは一樣ではない。教会設立の様々な事情として、初代会長になった人の資質が、またその家の家格とも言うべきものが大いに影響を及ぼした事例を取り上げてみた。